

令和元年度 南中学校 学校評価報告書

重点取組分野	令和元年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①一人ひとりの生徒の基礎的基本的な学力を定着させるために、指導方法の工夫や個に応じた指導及び家庭学習の習慣付けなどを行う。②生徒が自らの考えを発表したり、相手の考えを聞いたりして、より主体的に学習に取り組めるように、「主体的・対話的で深い学び」の考え方を取り入れた授業展開を研究していく。	・基礎的・基本的な学力を定着させるため、指導方法の工夫を行っている。引き続き、工夫して取り組んで行く必要がある。定期テスト前には、希望する生徒に学習相談を行い、学力向上を行っている。 ・研究授業等を通して、「ICT活用」や「主体的・対話的で深い学び」等を視点とした授業改善が進み、生徒が主体的・対話的な学習に取り組むようになってきている。	B
豊かな心	①行事を通して生徒一人ひとりが成長を感じられる指導や評価を大切にする。②人とかかわりをもつことで自分の存在を肯定的にとらえ、楽しさを感じ、自らの働きかけで人の役に立った、人に喜んでもらったなど相手の存在によって得られる「自己有用感」がもてる指導に努める。	生徒が主体的に教科学習、行事、部活動に取り組み、協力し合う中で互いを認め合い、充実感や達成感、自己有用感をもてるように声かけに努めた。特に特別の教科「道徳」では様々な題材を「自分事」としてとらえられるように話し合い活動を積極的に取り入れるようにした。	B
健やかな体	①体力向上に向け、一校一実践運動を通し、生徒一人ひとりが課題に取り組む態度を育てる。②基本的生活習慣の定着と健康・安全についての理解を深めるために健康教育の充実を図る。	①体力向上のために、授業の初めに3分間走やボールでパスやドリブルをしながら走る取り組みを意欲的に行った。②学校保健委員会では、職員の関心の高かった食育をテーマに、生徒の食べたいお弁当のメニューとその栄養素について保健委員が調べ、発表した。また、小学校の栄養教諭の講演を通して必要な栄養素とお弁当にふさわしいメニューを考えた。	B
児童生徒理解	①年3回の教育相談日を設けたり、日頃から声かけを行ったりするなど、生徒一人ひとりに寄り添った生徒指導に組織的に取り組む。②生徒指導会を複数回実施し、一人ひとりの生徒について情報を共有し組織的な対応を行う。	①年3回の教育相談における生徒の情報を学年教職員で共有するとともに、学校全体に関わる生徒指導が起きたときにも臨時で教育相談を行うなど対応することができた。②月に一度の指導部会の中で各学年の情報を全体で共有することができた。	B
地域連携	①地域行事や地域防災への参加、ボランティア活動、職場体験、福祉施設との交流を通じて、地域と相互に係わり合う中で、生徒の健全育成を目指す。②地域連携について、部活動や委員会活動がより効果的な取り組みができるように検討、実践する。	委員会活動や、ボランティア活動として地域清掃を行うことができた。全校の取組としては、笑顔のカードで福祉施設との交流ができた。また、部活動単位での地域交流として、福祉施設での演奏や、地域の祭りへの参加、餅つき行事などにも積極的に参加することができた。	B
キャリア教育	①身近な人々との関わりを通して自己を見つめ、その中で自分の生き方を考える。②職業調べ、職業講話、職場体験を通して自分自身の適性を知り、自己理解を深める。さらに、進路選択について、自分自身の適性を知り、さらに自己理解を深め、具体的な進路に結び付ける。	1年職業講話は、講師を招き実施し、身近に職業を感じる事ができた。2年職場体験では、新規受け入れ先を検討し、体験先を広げ、生徒と他者との関わりを通して、働くことの意義やマナー学ぶことができた。3年の進路選択では、職業学習が生き方の見通しをもつための進路選択に役にたった。	A
いじめへの対応	①いじめ防止研修を行い、全教職員のいじめに対する感度を高くするとともに、生徒指導部と連携した教育相談や生活アンケートにより細かな変化を見逃さない体制をつくる。②いじめ防止対策委員会を開催し、認知された案件の経過確認をていねいに行うことで再発防止に努める。	①いじめ防止研修を年2回行うとともに、生活アンケートを実施し、いじめの早期発見に努めた。②毎月第1週にいじめ防止対策委員会を開催し、対応方針を定めるとともに、具体的な対応や支援に努めた。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①校内授業研修やメンターチームなどの研修会を充実させる。キャリアステージに応じた各種研修会を積極的に活用し指導力や資質の向上を目指す。②組織の活性化、効率化を目指し、主幹教諭や各主任等のミドルリーダーの指導力を有効活用するため、主幹・学年主任会等でより良い学校運営に向けて検討していく。また、職員の負担軽減についても検討していく。	・校内での研究授業を教科を中心に2回実施した。1回目は、5年次以下の教員を対象として行い、指導主事に参加していただき、授業力向上への貴重な意見を聞いた。2回目は、全職員が略案を作成し、互いの授業を見合うことでの、気づきや発見を今後に生かせるような会となった。 ・メンター研修を行うことで、職員の課題共有の場となった反面、ミドルリーダーの育成、指導力を上げていく必要性を感じた。また、職員の負担が今以上に軽減できるように、主幹・学年主任会を中心に検討をしていく必要性を感じた。	B
ブロック内評価後の気付き	・年2回実施しているブロック授業研では、教科による研究討議にとどまらず、各領域での研究討議を行った。「9年間で育てる子ども像」について、小中で話し合いの時間を作ることで、9年間の見通しをもった指導を行えている。 ・ブロックで掲げた児童・生徒育成のためのキーワードについて、現状を把握し、指導に生かせるように、職員全体で情報共有の時間をとり、よりよい形で児童・生徒に還元できるようにしていきたい。		
学校関係者評価	学校評価アンケートのまとめを見ると、全体的に肯定的な意見の割合が少なくなっているようだが、地域から学校を見ると、子どもたちも教職員も学校をよりよくしていこうと活動しているように感じられる。8つの重点取組分野の評価は、A評価に向けて、アンケートの結果を分析し、向上できるような努力を期待したい。また、外部に向けて、さらに工夫をして学校の様子を伝えて欲しい。今後も学校、家庭、地域との連携を深め、子どもの育成に関わっていききたい。		

中期取組目標振り返り	8つの重点取組分野の具体的な実現に向けて、昨年度までの成果や課題を職員全体で共有しながら、学校教育目標を常に意識した取組を始めた。その中で、再来年度から始まる新教育課程に向けて、生徒が今まで以上に身近に感じられるような学校教育目標になるよう、管理職、主幹・学年主任が中心となり、話し合いを進めている。 生徒が互いに認め合い、助け合うことができるように、様々な事象、場面を「自分事」として捉えることができるような指導、声かけに努めた。学習指導においては、略案を作り、目当てを明確にすることで、授業での気づきや発見の機会を増やし、授業力の向上につながる取組を行った。
------------	--